

**A case study of a Chinese child's vocabulary development
in early language learning
— Focusing on utterances made up to 25 months old —**

WANG Man

Keywords: Chinese-Japanese bilingual, language learning, vocabulary development, pronunciation, word classes, semantics

Abstract

This study aims to provide a Chinese-Japanese bilingual model by investigating a Chinese-Japanese bilingual child's vocabulary development in early language learning. This study focuses on three different vocabulary items: (a) word classes, (b) pronunciation, and (c) semantics, based on utterances the child made when up to 25 months old. First, this study describes Chinese vocabulary development in four different stages and gives an overview of Japanese vocabulary development. Then, this study determines the features of vocabulary development by analyzing the developmental process of the three items.

日中バイリンガル幼児の言語習得初期に おける語彙の発達 —2才1ヵ月までの発話を中心に—

王 漫

要旨

近年、外国人が日本へ流入する動きが強まりつつあり、在日中国人の人数は急速な増加を示した。2018年74万人を超え、在留外国人全体の約3割を占める。こういう背景に、在日中国人の子供は、母国語の中国語と日常言語の日本語の両方を習得することが要求される。日中バイリンガル教育の実現は在日中国人家庭にとっても、日本の多文化社会の形成に大きな意義を持つ。

本研究では、在日中国人幼児の一人を対象とした語彙発達の考察を通して、バイリンガル研究に日中バイリンガルのモデルケースを提供したい。本研究は、まず言語習得初期の4つの時期において、語彙の発音、品詞、意味概念の三つの語彙項目について記述した。そして、三つの語彙項目の発達過程を分析し、対象児の語彙発達の特徴について考察を試みた。

キーワード：日中バイリンガル、語彙発達、発音、品詞、意味概念

0. はじめに

グローバル化の進行に伴い、旅行、留学、就職または定住で外国人が日

本へ移動する動きが強まっている。少子高齢化による労働力不足に対応するために、日本政府は外国人を労働者として積極的に受け入れる政策を打ち出した。こういう背景には、在日外国人が急速に増加した。入国管理局の統計によれば、2018年までに中長期滞在中国人は74万人に及び、在留外国人総人数の約3割を占めており、全体においては一番多い。これらの中国人の中に、家族を日本へ連れる人と日本で家庭を作り子供を産む人は多数存在する。彼ら自身だけではなく子供も現実的に二言語環境に置かれている。しかし、彼らの子供は中国語や日本語に接触しながら、二言語とも母語話者のレベルに達するとは言い切れない。筆者が接した中国人二世の中に、バイリンガルの成功者はいるが、人数が多いとは言えない。多くの人はどちらかの一つの言語（特に日本語）に精通することは現状である。二言語習得はどんな過程を経ているのか。いつから二言語の不均衡が起るのか。なぜ二言語の不均衡現象が起るのか。筆者は来日し、特に大学院に入ってから、このような一連の疑問を持つようになった。

在日中国人の子供にとって、言語教育は緊急な課題であることは言うまでもない。中国人家庭内においても日本社会においても、中国語と日本語のバイリンガル教育は重要な意義を持つ。在日中国人から見れば、親族との往来及び母語文化の継承の担い手として、中国語教育は家庭内においては当然重視されるべきである。一方、生活や就学や就職などの場合では、日本社会に馴染むために、日常使用言語としての日本語の習得は現実的に要求される。日本社会から見れば、日本型の多文化社会の実現には、外国人の異なる言語や文化そしてアイデンティティを尊重しながら、外国人を日本社会の一員として受け入れることが求められる。それに向けて、日本社会が在日中国人の子供の二言語の習得を積極的に支援することは最も重要な一歩だと言える。この点においても、バイリンガル教育は避けられない課題だと考えられる。学校教育や家庭教育にバイリンガル教育の導入によ

り、在日中国人の子供が二言語とも体系的に学習機会を与えることが望ましい。そこで、日中バイリンガル研究に関する研究成果は、教材の開発、教授法の検討などといった言語学習環境の整備の面でバイリンガル教育に大きく貢献できることを期待する。

1. 研究概要

1.1 研究目的

近年バイリンガル教育の風潮が強くなり、バイリンガルに関する研究も言語習得の分野において大きな関心を引き、多くの研究成果が現れた。しかし、その中に英語とのバイリンガル研究が主流を成し、人口数が一番多い外国人としての在留中国人を対象とした日中バイリンガル研究は進んでいない¹⁾。個別の研究は日中バイリンガルの就学児童の二言語能力について調査を行った。実際の言語使用や言語環境について養育者から報告が得られたが、具体的言語項目を詳しく追跡するものではないため、言語発達の過程をたどることを期待できない²⁾。そして、低月齢幼児が有意義な言葉を産出し始める早期段階において、言語形態の具体的記述や言語発達過程の追跡調査はなおさら稀である。従って、本研究は日中バイリンガル幼児の言語発達初期における語彙の発達を筆者自身の子育ての経験を通して観察し、分析したい。

本研究は日中バイリンガル幼児の言語発達初期における語彙の発達を考察することによって、バイリンガル研究に日中バイリンガルというモデルケースを提供したい。本研究は、まず語彙発達初期における発音、品詞種類、意味という三つの語彙項目を詳細に記述し、対象児の語彙発達の具体的過程を辿る。そして、具体的な言語形態や言語現象の分析を通して、対象児の語彙発達の特徴や規則を明らかにする。

1.2 言語習得の理論背景

人はどのように言語を獲得するのかについて、1920年代から米国で心理学及び発達心理学、言語学、神経科学などの様々の分野において盛んに議論された。言語習得に関して最も早く提起された言説は米国の心理学者 Allport (1924) による機械的模倣説だといえる。その後米国の心理学者 Whitehurst (1975) が機械的模倣説をさらに発展させ、選択的模倣説を提起した。彼によれば、幼児の言葉は大人の言葉から機能の類似する語彙や文構造を選択し模倣したものである。Skinner (1957) では言語学習が全て刺激-反応の結果によって形成された言語習慣であると論じ、強化説を打ち立てた。強化説を支持する Mowrer (1960) では言語学習が模倣とともに、外部環境からの反応に決定されると主張した。しかし、生成文法を創り出した米国の言語学者 Chomsky (1959) では Skinner の強化説を強く批判し、言語が脳に備わっている言語装置によって産出されるという言語生得論を提唱した。ドイツの言語学者及び生物学学者 Lenneberg (1957) では Chomsky と同じく言語生得説を擁護するが、彼は生物学の視点から自然成熟説を提出した。彼は著書『言語の生物学基礎』の中で、言語は耳などの身体器官が発達するような一種の成熟過程であり、生物学的に決定されていると述べた。そして、認知発達や成長が一定段階に達すると、言語構造が自然に実現することも指摘した。スイスの発達心理学者の Piaget (1950) では、認識論の視点から言語は認知的結果であり、身体と環境の相互作用によって獲得した知識を反映する認知構造の一部過ぎないと主張した。

以上述べた様々な分野から得られた言語獲得に関する知見を踏まえ、われわれは言語習得の過程に起こる多くの言語発達現象を理解・解釈できるようになった。

1.3 言語習得の実証研究

言語習得分野において、これまで提唱された言語習得の仮説を検証する実証研究も多く行われてきた。言語発達を全面的に捉える研究には、音韻、意味、文法や誤用などの多くの言語項目について日本人幼児の言語発達を概観した伊藤克敏（1999）と中国人幼児の言語発達初期における文法の発達を中心に記述した周国光（2016）が挙げられる。祁文恵（2011）³⁾ は意味文法論の観点から3才児の自然発話データをもとに、言語発達初期における語彙の意味内容を分析した。そして、具体的言語項目を追跡した実証研究には、呉天敏・許政援（1979）、朱万喜（2001）、小椋たみ子（2007）などがある。これらの先行研究は本研究の比較対象を提供するため、以下ではこれらの先行研究を取り上げて紹介する。

(1) 呉天敏・許政援（1979）

呉天敏・許政援（1979）では、5名の中国人幼児を対象に生まれてから3才までの言語発達を調査し、幼児の言語が言語表出の前段階、一語文、簡単文、複文の段階で発達していくと指摘した。言語表出の前段階において、幼児は自ら意味のある言葉を発しないが、大人の指導により音が意味を持つことを認識し、ある音を特定の物や意味と対応するようになる。コミュニケーションの場面において、大人の指示に対して幼児の身振り手ぶりの反応が常に観察された。その後、幼児の語彙の発達が始まり、一語文を発するようになる。一語文の段階において、幼児は単独の単語をしか言えないが、一つの単語で文に相当する豊富な意味を伝える。単語の意味は最初に特定の物と結び、それから同じ概念に属すほかの物と対応するようになる。語彙の意味概念に関しては、具体的な意味概念から抽象的な意味概念を表す語彙や品詞を習得していく。そして、幼児は具体的概念から抽象的概念を表す語彙や品詞を習得していく。例えば、呼称名詞について、

幼児は具体的な呼称名詞（例えば、父や母を表す「爸爸」「妈妈」など）を習得してから比較的抽象的な人称代詞（例えば、わたしやあなたを表す「我」「你」など）を習得する。

(2) 朱万喜 (2001)

朱万喜 (2001) では、ある中国の幼稚園に在園する 1 才から 5 才までの幼児を対して、語彙テストの実験を用いて中国人幼児の言語発達初期における呼称名詞の使用状況を調査しました。そして、2 名の幼児の発話の縦断データから呼称名詞の習得過程や特徴を考察した。調査の結果、「爸爸」「妈妈」の使用比率が最も高く 30% 近くを占め、次に「叔叔」（叔父）が 10.3%、「奶奶」（父方の祖母）が 6.6%、「爷爷」（父方の祖父）が 3.4%、そして「阿姨」（叔母）「哥哥」（兄）「姐姐」（姉）「爹爹」（父）が 2% 近くを占め、ほかの親族呼称が 1% に満たさない。親族呼称より関係親密度が高い家族呼称の使用比率が最も高いことが分かった。呼称名詞の出現順序から見ると、11 ヶ月で「妈妈」が初めに、1 才で「爸爸」、1 才 1 ヶ月で「阿姨」「外婆」（母方の祖母）「爷爷」「奶奶」「太太」（曾祖母）などの家族呼称や親族呼称、それから血縁関係を持たない社会呼称としての「伯伯」（父より年上の叔父）「姐姐」「哥哥」などが現れる。このような社会呼称より家族呼称や親族呼称が先に習得されることは普遍的な現象である。家族関係や親族関係が最も親密な人間関係で、幼児は常に大人に家族呼称や親族呼称を教わると同時に、これらの呼称名詞の使用は初期の交際や欲求の実現にとって極めて重要である。呼称名詞の習得の具体的プロセスに関しては、幼児は最初に特定の人物を呼称名詞の原型とし、それから呼称名詞を原型と同じ属性や特徴を有する人物に拡大使用すると指摘された。例えば、幼児は最初に「爷爷」を原型となる自分のお爺さんと結び付け、そして原型を通して「爷爷」が白髪や老いなどの特徴を意味することを認

識するようになる。これらの共通属性に基づいて、幼児は「爷爷」を他の知らない年配の男性に拡大し使用する。一方、原型から拡大使用の過程において過剰般化が生じることもある。例えば、幼児は「爸爸」を習得したあとに、自分の父親と同じ年齢の男性も「爸爸」と呼ぶ。大人の指導により幼児は自ら自分の父親だけを「爸爸」と呼ぶことに気が付き、他の男性を「叔叔」と呼ぶことに修正し、新しい呼称名詞も習得する。

(3) 小椋たみ子 (2007)

言語発達初期において名詞優位か動詞優位かについて言語習得研究者の間で絶えずに論争が起こっている。名詞優位を主張する研究者は幼児の認知能力が限定で、名詞は動詞より概念的に簡単であるため学習しやすいと考える。一方、主語が省略できるか否か、動詞が文頭或いは文末に来るかという言語自体の特性または養育者のインプットが名詞と動詞の習得に影響すると主張する研究者もいる。小椋たみ子 (2007) では、158 名の 20 ヶ月の日本人幼児を対象とし、日本語マッカーサー乳幼児言語発達質問票 (JCDIs) を用いて語彙の構成を調査した。調査の結果、名詞が一番高い比率を占めていた。そして、2 名の子供に対して、語彙増加や文法発達につれて品詞の量的変化を追跡した。養育者の動詞優位にかかわらず、語彙急増期では名詞優位であるが、文法発達に伴い、動詞優位になることが分かった。また、31 名の子供と養育者の玩具場面と絵本場面において幼児の品詞の使用傾向を観察した。絵本場面においては、幼児の発話は養育者の名詞優位と一致するが、玩具場面では、養育者の動詞優位と一致せず、文法発達に伴い動詞優位に移行していくことが明らかである。以上の結果から、言語発達初期において幼児は名詞を学習しやすい傾向を有すると結論を付けた。

以上のように、単一言語の語彙発達についての実証研究を紹介した。朱、

小椋は特定の語彙項目について調査したが、各段階における発音、品詞構成、カテゴリ構成などから語彙項目を総合的に考察していない。呉・許は中国語の語彙や文法を簡単に紹介したが、追跡調査は断続的に行われたため、綿密な追跡調査による完全な発話データが必要だと考える。本研究では、日中バイリンガル幼児を対象とし、語彙の発音、品詞、カテゴリなどの下位項目の具体的な習得過程を辿りながら、言語発達初期の語彙習得の特徴について考察する。そして、日中バイリンガル幼児の二言語の語彙習得を比較する。

1.4 研究方法

(1) 研究対象

本研究は筆者の息子（名前のアルファベットはLV XIANYUで、以下、苗字の頭文字を用いてL児と略称する）を研究対象とし、言語発達の初期における語彙の発達を記述するものである。幼児の言語発達は生理発達、成長背景及び言語環境といった要素から大きく影響を受けると考えられるため、以下ではL児の成長経歴を簡単に説明する。

L児は日本で正常分娩し、出生時生理的発達に異常なく、その後も認知的発達に異常なかった。L児が生まれてから成長環境が度々変化したことがあり、L児の保育環境や言語環境といった成長経歴は表1の通りである。

L児は日本語と中国語の両方とも接触しており、日本語より中国語との接触機会が多かった。連続的で長い期間で接触していた中国語と比較すると、日本語との接触は断続的で、時間的にも短い。家庭内においては、L児の父母は家庭内で中国語中心の言語教育観を持ち、L児に対して日本的に標準中国語の普通話で話しかけており、歌遊び、絵本読みなどの手段を通して日常的にL児の中国語学習に積極的に援助や指導を与えた。L児が中国にいる間に、祖母と親戚の間は方言で話すことはあるが、父母は祖母

表 1 L 児の成長経歴

年齢	保育環境	言語環境
生まれ～6 ヶ月	父母との三人家族が日本で生活していた。母親は主要な保育者となった。	中国語
7 ヶ月～1 才	平日の昼間は平均週 2 回に市の保育園で過ごし、日本人の保育士が L 児の世話をしていた。他の時間帯に、母親が主要な保育者として、子育てしていた。父親は日本で就職しており、帰宅後や休日に育児に積極的に参加した。	中国語、日本語
1 才 1 ヶ月～ 1 才 7 ヶ月	父親が就職、母親が大学院進学したため、L 児を一時的に中国に送った。中国で自営業をしている祖母が主要な保育者となり L 児の世話をした。また、祖父、叔父と暮らし、中国人の親戚と接触した機会が多かった。	中国語
1 才 8 ヶ月～ 2 才 1 ヶ月	L 児は日本に戻り、再び父母と一緒に生活した。1 才 8 ヶ月半ごろから、平日の昼間は市の保育園で日本人の子供と保育士と過ごし、他の時間帯では父母が L 児の世話をしていた。	中国語、日本語

や親戚に対して L 児と普通話で育てるように要求した。保育園においては、日本人の保育士たちは日本語で L 児とコミュニケーションを取っていた。

(2) データ収集方法

L 児が 1 才 7 ヶ月のときに、再び筆者と一緒に生活し、L 児の言語発達を観察する機会は得られた。筆者は 1 才 7 ヶ月から 2 才 1 ヶ月までの間、L 児の発話内容、意味、発話場面などについて毎日日記で詳細に記録した。そして、月一回定期的に L 児の発話場면을一時間録画した。録画データを参照に、日記記録のデータの確認や補正を行う。

日記で採集した発話データに対して、整理や分析の作業を行った。本研究は 1 才 7 ヶ月から 2 才 1 ヶ月までの間の発話データから語彙のみを抽出

し、発音、品詞、意味など語彙の下位要素の発達を記述し、言語発達初期の語彙の発達について分析した。

日記記録や語彙の抽出は次の4つの原則に従って行われた。

- ① 音声的特徴が弁別できない発音または発話を記録しないこと。
- ② 伝達機能を持たない発音または発話を計算しないこと。(例えば、歌詞或いは大人のことばを単に繰り返した発話を計算しない。)
- ③ L児が自ら創造したことばまたは発音が実際の伝達意図や意味がある場合、幼児語と見做して計算すること。(例えば、L児が「gaga」という発音を発明し、実際に「肉」を指示する場合、「gaga」は成人言語とは全く違うが、単語として計算する。)
- ④ 発音は成人言語と部分的に一致する発音または発話を中間言語と見做し、計算に入れること。(例えば、L児が「苹果」を正確に言えるまでに、ただの「果」を発する場合、「果」を単語として計算する。)

2. 語彙の発達

本研究は対象期間をL児が言葉を発し始める早い段階に設定し、発話データの採集は1才7月20日から2才1ヵ月30日までの194日間に行われた。この期間において、L児の発話が短く、主として一つの単語からなる一語文である。年齢の増加につれて語彙学習の内容、学習速度や語彙能力などが異なり、語彙能力の発達の具体的過程をより明確に示すために、研究対象期間を均等割りに次の4期に分けた。

- | | |
|---------------------|------------------------------|
| 第1期：1:07:20～1:09:07 | 2017.05.06～2017.06.23 (49日間) |
| 第2期：1:09:08～1:10:26 | 2017.06.24～2017.08.11 (49日間) |
| 第3期：1:10:27～2:00:12 | 2017.08.12～2017.09.28 (48日間) |
| 第4期：2:00:13～2:01:29 | 2017.09.29～2017.11.15 (48日間) |

時間の区画に関しては、各行の一つ目の波線の前は各時期の開始年齢、後ろは終了年齢を示す。二番目の波線は年齢と対応し、各時期の開始日付と終了日付となる。また、() は各時期の日数を示す。

本章では、時期ごとに品詞、発音、意味などそれぞれ語彙の下位項目について記述し、中国語の語彙の発達を考察する。そして日本語の語彙の発達にも簡単に触れる。

2.1 品詞の発達

現代まで続く古典の品詞分類は範例関係及び連辞関係に基づくものであるため、品詞種類は単語が文中における働き方、他の単語との結合方法を示している。それに、このような品詞分類の結果として、品詞種類はある程度単語が事物か動作かなどの属性を反映することもできる。例えば、名詞がものを表し、動詞が動作を表し、そして助詞や助動詞はそれら自体が具体的意味を持たず、文の中で一定の機能を果たす。本研究は、L 児が習得した単語の具体的意味を一つ一つ記述する前に、語彙の品詞構成を分析することを通して、語彙全体の意味構成を概観したい。ここでは、従来の品詞種類を援用し、2才1ヵ月までL児が習得した語彙を名詞、動詞、形容詞、擬音詞、間投詞、代詞、数量詞などに分ける。4期の語彙発達の状況を品詞別に表2のように示すことができる。各時期の語彙量の比較や品詞構成の分析を通して、語彙の学習速度の変化や品詞習得の諸特徴を明らかにする。

(1) 各時期における語彙の学習速度が異なることが分かった。語彙発達の最初期の第1期と第2期では、L児はほぼ同じペースで、それぞれ22個と24個の語彙を新しく習得した。第2期、つまり1才10ヵ月までに習得した語彙数は50個に近い。1才11ヵ月後の第3期に入ると、語彙数は急激な増加を示した。第3期において、L児が習得した語彙数は88個で

表 2 2才1ヵ月までに品詞の発達

時期	名詞	動詞	形容詞	擬音詞	間投詞	代詞	数量詞	合計
第1期	11	3	2	3	2	1		22
第2期	15	4	1	2	2		1	24
第3期	58	23	4	1	2			88
第4期	28	20	2		1	1		52
合計 (%)	112 (60.2)	50 (26.9)	9 (4.8)	6 (3.2)	7 (3.8)	2 (1.1)	1 (0.5)	186 (100)

あり、第1期の4倍に相当し、第2期までの語彙総数の2倍に近い。発達心理学では幼児が急に新しい語彙を多くいえるようになる時期を「言語爆発期」⁴⁾と呼ぶ。L児の語彙学習に急峻な変化が起こったこの第3期はそれに相当する。「語彙爆発期」が起こるメカニズムについて、命名の洞察、精緻な概念の獲得、カテゴリ分け能力の獲得、複数語彙の並列学習など様々な説が提唱された。小林・南・杉山(2013)では、20名の日本人幼児の縦断データを解析した結果より、これらの仮設を否定し、語彙爆発は理解に至る学習プロセスの効率化によると指摘した。一語文を連続的に発し始める第4期では語彙増加は第3期より少し減り、52個であるが、第1期と第2期より多い。筆者は、第4期における語彙の増加が急に減速した現象は学習内容の変化による可能性が存在するのではないかと考える。すなわち、語彙学習がある程度に達すると、L児は語と語の間の意味関係や文法関係などを新しく学習し、学習内容の拡大によって語彙の学習時間が減少し、語彙の増加も自然に減速した。

(2) 研究対象期間においてL児の語彙に7つの品詞種類が現れ、その中に名詞優位が見られる。2才1ヵ月までにL児が習得した186個の語彙の中に、名詞は112個であり、全体の60%に達する。そして各時期においても名詞の増加が最も多い。名詞の次に、2才1ヵ月までに動詞を50

個習得し、全体の 26.9% を占める。動詞は名詞と同じく早時期から習得したが、第 1 期と第 2 期がそれぞれ 3 個、4 個の少ない数である。第 3 期に入ると、動詞は急に増加し、23 個を習得した。第 4 期も 20 個を習得した。形容詞、擬音詞、間投詞は第 1 期から早く現れたが、わずかな個数でとどまっていた。代詞と数量詞の数は最も少なく、同じく 2 個しかない。この 7 つの品詞と対照的に、接続詞（例えば、「因为」「所以」「可是」など）、語気詞（例えば、「吗」「吧」「呢」など）、助詞（例えば、「着」「了」「的」など）、助動詞（例えば、「能」「敢」「想」など）などの品詞は一つも現れていない。これらの品詞自体は特定の意味を持たず、主に文の中で一定の文法機能を果たすため、意味がさらに抽象的だけではなく（例えば、語句間の順接関係や逆接関係などを表す）、相当な構文能力も要すると考えられる。それらの品詞発達過程を明らかにするために、継続的に追跡する必要がある。

以上では L 児の語彙の品詞構成を見てきた。L 児の名詞優位と大椋（2007）の日本人幼児の結果と一致している。動詞について、大椋では日本人幼児の形容詞、動詞の順位となり、L 児の結果とは一致していない。

2.2 名詞の発達

前節で品詞の発達を考察した結果、2 才 1 ヶ月までの L 児の語彙の全体においては名詞が最も多いことが分かった。本節では、名詞の意味概念と発音について記述し、その発達過程を追いながら、名詞の発達の特徴を考察する。

2.2.1 名詞の概念習得

(1) 全期間における名詞の概念習得

2 才 1 ヶ月までに L 児が習得した名詞を食べ物、動物、人間関係、身体

関係など13カテゴリに分類した。次では、表3をもとに、カテゴリの構成を分析し、具体的な語例を提示したうえで、意味概念の習得の特徴を考察する。

[1] 語彙発達初期においてL児は具体的意味概念を学習しやすい傾向を有する。表3が示すように、2才1ヵ月までにL児が習得した名詞は合計112個で、形状という比較的に抽象的な概念を表す「圓」を除き、他の111個の名詞はすべて具体的な意味概念で、実在の人或いは物を指す。言語学習と認知発達との関わりは従来議論され、言語学習は認知能力に制約

表3 2才1ヵ月までに名詞の概念習得

カテゴリ	語彙	個数	比率 %
食べ物	gaga 酒 包包 トト 飯 果 蕉蕉 汤 牛奶 餅 米 冰冰 蛋 面 甜甜圈 糖 薯 豆腐 菜 菇 莓 栗 甜甜 茄 汁 柿 鸡蛋 豌豆 苹果 香蕉 肉 桔子	32	28.6
動物	鸟 猪 马 虫 狗狗 羊 老虎 猩猩 龙 八哥 鸡 獅獅 骆驼 象 鼠 鱼 雀 兔	18	16.1
戸外の物	草 树 星星 水水 地 花 水 天 阳 云 沙子	11	9.8
人間関係	妈妈 爸爸 奶奶 中中 爷爷 姐姐 哥哥 伯伯 阿姨	9	8.0
家庭用品	泡泡 杯 被 纸 伞 盆 勺 枕头 钱	9	8.0
身体関係	尿 脚 涕 头 耳朵 鼻孔 下巴	7	6.3
乗り物	车车 轿车 卡车 机 车 摩托车 警车	7	6.3
服飾	袜袜 鞋 裙 裤 镜 围兜 帽	7	6.3
家具と部屋	门 灯 冰箱 窗 房	5	4.5
遊び道具	球 hua da da da da ti	2	1.8
文具	书 笔笔 包	3	2.7
ゴミ	垃圾	1	0.9
形状	圓	1	0.9
合計		112	100

されるという観点が主流である。この観点に立てば、L 児の語彙発達初期におけるこのような語彙のカテゴリ構成は認知発達初期において抽象的意味概念より具体的意味概念が認知しやすいと考えられる。

[2] 意味伝達に必要性が高い意味概念や接触頻度が高い意味概念に関して、カテゴリの構成員は高い習得度を示した。習得率が上位三位に入る名詞は食物の名前、動物の名前と戸外の物を表すもので、それぞれ 32 個、18 個、11 個である。家庭用品、人間関係、身体、乗り物や服飾を表す名詞はすべて 10 個未満である。このようなカテゴリ構成は L 児の心理的動機や意味概念との接触頻度と深くかかわる。食べ物、戸外の物、人間関係や家庭用品は衣食住居の基本的な日常活動の中において常に接触する概念で、いずれのカテゴリも高い習得率を示した。食べ物に関して、高頻度の出現数は当然食べ物の学習を促進していると考えられるが、摂食欲求は食べ物の学習動機と付けられる重要な要因である。生物としての人間が生きるために、摂食欲求は最も本能的な欲求である。L 児にとって、ことばを通して効率的に摂食欲求を達する必要性が最も高く、食べ物を一番多く習得した。そして、学習媒介は多様化で、L 児は実物、おもちゃ、写真や絵などを介して、事物の概念を認識する。例えば、動物を表す名詞は 18 個ありその中に日常生活で実物を見て習得した「鳥」(鳥)、「魚」(魚)、「虫」(むし)、「狗」(犬)などもあれば、絵本や写真を通して習得した「八哥」(実際は鸚鵡であるが、大人がはっかちょうと間違って「八哥」と教えた)、「大象」(ぞう)などもある。また、乗り物のカテゴリの構成員は殆どおもちゃをきっかけに習得した。

[3] L 児は最初に基本レベルの意味概念を学習し、概念間に殆ど上下関係を持たない。例えば、下位概念の「红酒」(ワイン)、「啤酒」(ビール)や「大米」(お米)、「小米」(粟)より上位概念の「酒」(さけ)や「米」(黒米、糯米など色々なお米や粟が含まれる)、上位概念の「身体」

(身体)、「食物」(食べ物) などより「果」(りんご)、「蛋」(卵)、「脚」(足)、「頭」(頭) などが習得される。これらの名詞は殆ど日常生活や会話の中に頻繁に用いられる語彙で、認知しやすい。そして、L 児は「鳥」「八哥」「鸡」「雀」などをすでに基本レベルの概念として習得したが、「八哥」「鸡」「雀」を「鳥」の下位概念であることを認識していない。対象研究期間において基本レベルから下位概念に拡張する学習過程に関して、車のカテゴリの形成の一例だけが挙げられる。「車」(車) の概念は最初に自動車或いはおもちゃの自動車に限定された。その後、「車」の概念範疇が拡大し、バイク、パートカー、トラックも包括された。「轿车」(自動車)、「摩托车」(バイク)、「卡车」(トラック)、「警车」(パートカー) などの下位概念の名詞を習得したあと、L 児は状況に応じて上位概念と下位概念の名詞を使い分けるようになった。

上述べたように L 児は様々な手段を介して事物の概念を学習し、日常生活の中で常に接触する具体的人や物の概念を学習しやすい傾向を有する。そして、概念範疇の拡大や縮小などを繰り返して、意味概念の上下関係を習得する。

(2) 各時期における名詞の概念習得

以上では名詞のカテゴリ構成、各カテゴリの習得度を分析し、名詞が表す意味概念の特徴や全体的学習傾向について考察してきた。では、カテゴリはどの順序で発達するのか。また、各カテゴリを構成する個々の単語の出現順序はどうだろうか。以下では、各時期において習得した名詞を表4、表5、表6、表7に示しながら、カテゴリ及びカテゴリ構成員の発達過程を辿っていく。

L 児が言語を表出し始めてから間もない第1期では、習得した名詞は少なく、わずか11個である。その中、扶養者の両親を指す呼称「爸爸」「妈

表 4 第 1 期 (1:07:20~1:09:07) 名詞の習得

カテゴリ		語彙	個数	合計
人間関係		妈妈 爸爸	2	11
食物	穀類	包包 (面包)	1	
	肉	gaga (肉)	1	
	飲物	酒	1	
家庭用品		泡泡 (泡沫)	1	
玩具		球	1	
排泄		尿	1	
動物		鸟	1	
自然		草 树	2	

妈」とも早く習得された。「妈妈」は「爸爸」より先に現れ、「妈妈」の出現が1才7ヵ月で、「爸爸」が1才9ヵ月であった。呼称名詞の中に両親を指す家族呼称が先に習得されることは、L児は生まれてから両親と長い期間一緒に生活し、両親との接触は最も頻繁であったためと考えられる。そして、主要な養育者として母親はL児の面倒をしており、L児と遊んであげているため、L児の欲求と感情をよく理解している。L児が泣いたり、ものがほしがったりしたときに、まず母親に訴える。母親はいかにL児を満足し、慰めるか、その術を知っている。このような母親との高い緊密関係は「爸爸」より「妈妈」の習得を促した。朱万喜(2001)によれば、幼児の呼称名詞の習得は家庭背景や生活環境と大きくかわり、幼児と一緒に生活する親密度の高い家族の呼称を習得してから、親密度が低い家族や親族を習得ようになる(しかし、幼児は出生後の極初期から祖父母に育てられた場合に、主要な養育者としての祖父母との関係が父母より親密で、「奶奶」「爷爷」は「妈妈」「爸爸」より早く習得する可能性が高い)。L児の家族呼称の習得順序は朱の結論と一致している。

食べ物を目指す名詞には「包包」(パン)「gaga」(肉)と飲み物の「酒」がある。食事の場面で好きな肉のおかずを食べ切ったあとに、L児は「gaga」を発することで大人に肉おかずの追加を求める。L児は「包包」をいうことで、パンを食べていることを大人に知らせるか、大人にパンを求めるか、どちらかの意味を表す。L児は「酒」をいう際に、酒の種類を問わず、「红酒」「啤酒」などを含めてすべてのお酒を指す。L児は洗面台で手を洗う際に、ハンドソープの泡を指しながら「泡泡(泡沫)」でハンドソープを大人に求める。この場合、ハンドソープの名前はまだ習得されていないが、一つの有効な伝達方法として、L児は物の部分或いは特徴で物の全体を指すと考えられる。早い時期に習得した「球」(ボール)は、最初によく遊んでいる小さなボールだけを意味したが、その後スイカも「球」で表した。大人の修正を経て、「球」の正確な意味を習得した。L児がおしっこをしたあとに、おむつに触りながら「尿」と言うことで大人に知らせ、おむつの交換を要求した。この場合、「尿」は「尿」(おしっこ)か「尿不湿」(おむつ)かのどちらの意味を指している。

このようなL児が習得した名詞の発音また意味が成人言語と一致しない現象は、L児の語彙知識、構文能力などの言語表出能力や認知能力が限定されているためである。そして、L児は常に一つの単語を介して、その単語の意味を超え、希望、請求、命令、通知などの意図を大人に伝える。これに関して、「包包」の発話例を通して、場面によって同じ単語でも異なる意味を持つことが明らかである。L児はパンを食べるときに、お皿の中のパンを指しながら「包包」をいうことで、大人に「我在吃面包」(私はパンを食べている)或いは「这是面包」(これはパンだ)を意味するかもしれない。また、パンが食べたいときに、パンを指しながら「包包」を言うことで大人に「妈妈拿给我面包」(パンをちょうだい)の要求を表す場合もある。L児を熟知する家族や親族だけはある程度L児の意味を理

解することができる。

表5が示すように、第2期では名詞の習得数が15個であり、数量的に第1期とそれほど差はない。動物を表す語彙が一番多く、7個ある。その中、ある日アパートから出て階段を下りるときに、ゴキブリの死体を指さしながら言った「虫」と常に町の中で見られるペットドッグの「狗」(犬)のほか、絵本を通して習得した「猪」(豚)、「马」(馬)、「羊」(羊)、「老虎」(トラ)、「猩猩」(ゴリラ)がある。L児が習得した「车」は最初に実在の自動車とおもちゃの自動車だけを指し、トラック、バイクやバスなど他の車は含まれなかった。その後、L児はタイヤ持ち、走行可能などの車の内包的属性を認識し、同様な属性を有する「轿车」「卡车」などに対しても「车」で表すようになった。1才10ヵ月頃なると、絵本読み聞かせ、絵描きなど新しい保育活動が増え、それをきっかけにL児は文具の「书」(本)、「笔笔」(ペン)と天体の「星星」(ほし)を習得した。「星星」は最初に絵や写真の星を指した。また、L児は体の部分の「脚」、服飾の「袜袜」(靴下)「鞋」(靴)を習得した。

第3期において、名詞に量の急増やカテゴリーの豊かさが見られ、11カテゴリーの合計58個の新名詞が習得された。食べ物、動物、人間関係など

表5 第2期(1:09:08~1:10:26)名詞の習得

カテゴリ	語彙	個数	合計
食物	トト(萝卜)	1	15
動物	猪 马 虫 狗狗(狗) 羊 老虎 猩猩(大猩猩)	7	
乗り物	车车(车)	1	
体の部分	脚	1	
衣類	袜袜(袜子) 鞋	2	
文具	书 笔笔(笔)	2	
自然	星星	1	

表 6 第 3 期 (1:10:27~2:00:12) 名詞の習得

カテゴリー		語彙	個数	合計
食物	果物	果（苹果）蕉蕉（香蕉）莓（草莓）栗（板栗）	19	58
	野菜	菜（青菜）菇（蘑菇）		
	穀物	饭 米（玉米）面 薯（红薯）豆腐		
	肉卵	蛋（鸡蛋）		
	菓子	饼（饼干）冰冰（冰激凌）甜甜圈 糖		
	飲物	汤 牛奶 甜甜（药水）		
動物	哺乳	獅獅（獅子）骆驼 象（大象）鼠（老鼠）	9	
	鳥	龙（恐龙）八哥 鸡 雀（孔雀）		
	魚	鱼		
人間関係		奶奶 中中 爷爷 姐姐 哥哥 伯伯	6	
自然	天文	天 阳（太阳）	6	
	地上物	水水（水）水 地（地上）		
	植物	花		
乗り物		轿车 卡车 机（飞机） 车	4	
家庭用品		杯（杯子）纸 伞 盆	4	
家具と部屋		门 灯 冰箱	3	
衣類		裙（裙子）被（被子） 裤（裤子）	3	
文具		包（书包）镜（眼镜）	2	
遊具		hua da da da da ti（滑滑梯）	1	
ゴミ		垃圾	1	

第 1 期や第 2 期にすでに現れたカテゴリの構成員が多く増えると同時に、家具と部屋、遊具、ゴミの新しいカテゴリの構成員も多少習得された。

一番多く習得された食べ物の名詞は 19 個があり、果物、野菜、穀物、肉卵、菓子、飲物の 6 種類がある。食事に頻繁に出ている「果」、「蕉蕉」(バナナ)、「菜」(小松菜)、「飯」(ご飯)、「饼」(クッキー) などのほか、

絵本を通して習得した「莓」(イチゴ)、「冰冰」(アイスクリーム)もある。

動物を表す名詞も多く増え、9個ある。「鼠」(ネズミ)、「鸡」は動物園でよく見かける動物で、「魚」は公園にある池の中の鯉を指す。これらの名詞は実在の動物を見てから習得された。一方、「獅獅」(ライオン)、「骆驼」(駱駝)、「龙」(恐竜)、「八哥」など多数の名詞は絵本を通して習得された。

人間関係を表す呼称名詞は第1期の「爸爸」「妈妈」の後に、そして第2期の空白期を経て、第3期では親族呼称と社会呼称が6個増えた。親族呼称には、自分の祖母や祖父を表す「爷爷」「奶奶」、叔父のニックネームの「中中」や呼称の「伯伯」、親戚の姉を指す「姐姐」が習得された。親族の間に叔父の呼称「伯伯」よりニックネームの「中中」を呼ぶことが多いため、L児は叔父のニックネームを常に聞いて早く習得した。「姐姐」は最初に親戚の姉を指したが、その後年齢が同じくらい女の子も指した。も一つの社会呼称は「哥哥」で、同じ年齢の男の子を指す。呼称名詞の多数習得は他人との交流の中で、年齢、性別、関係親密度などに対するL児の認識が深まったことを反映するのではないか。

自然に関する名詞は6個あり、「天」(空)、「阳」(太陽)、「水水」(水)、「水」(水)、「地」(地面或いは床)、「花」(花)である。「阳」は第2期の「星星」と同じように、最初に写真や絵の太陽を指した。「水水」、「水」「地」「花」は実在の湖、地面や花を表した。

乗り物に関して、L児は車に対する理解が深まった。L児は形が異なる車の具体的名称、例えば「轿车」「卡车」を正確に言えるようになるとともに、それらの下位概念も「车」の意味範疇に包括された。L児は場面によって、「轿车」「卡车」や「车」を使い分け、L児が車に関しての概念間の下位関係を把握しているといえる。そして、L児はもう一つの乗り物の「机」を習得し、よく絵本に描かれている飛行機或いは実際に空に飛んで

いる飛行機を指した。

第3期においてL児の活動範囲は食事、着替え、住居など基本的日常活動に限らず、さらに拡大した。L児は部屋の中の環境を積極的に探索していく中で、日常生活でよく使われている道具などを表す名詞を習得した。例えば、「杯」(コップ)、「紙」(紙)、「傘」(傘)、「盆」(盥)などの家庭用品、「門」(ドア)、「灯」(ライト)、「冰箱」(冷蔵庫)などの部屋の構造や家具、「包」(かばん)、「鏡」(眼鏡)などの文具を表す新しい名詞が多く増加した。そして、L児が戸外で活動する機会が増え、自然に対する認識が深まるとともに、戸外の道具「hua da da da da ti」(滑り台)を習得

表7 第4期(2:00:13~2:01:29)名詞の習得

カテゴリ		語彙	個数	合計
人間関係		阿姨	9	28
食物	果物	苹果 香蕉 桔子		
	野菜	茄（茄子） 豌豆 柿（西红柿）		
	肉卵	鸡蛋 肉		
	飲物	汁（果汁）		
身体	体の部分	头 耳朵 鼻孔 下巴	5	
	排泄	涕（鼻涕）		
衣類	服	围兜 帽（帽子）	3	
	寝具	枕头		
自然	天文	云	2	
	地上物	沙子		
乗り物		摩托车 警车	2	
家具と部屋		窗（窗子） 房（房子）	2	
家庭用品		勺（勺子） 钱	2	
動物		兔（兔子）	1	
形状		圓	1	

した。

第4期の新名詞は第3期よりかなり減少し、28個ある。第4期において新名詞の全体的カテゴリ構成は第3期までのカテゴリ構成とほぼ変わらないが、名詞の意味概念は同一カテゴリの中の意味がさらに複雑で、或いは接触が比較的に遅れている概念である。食べ物に関する名詞は依然として一番多く、発音が修正された「苹果」、「香蕉」、「鸡蛋」や「肉」のほかに、食事にたまに出る「桔子」（みかん）、「茄」（なす）、「豌豆」（グリーンピース）、「柿」（柿）や「汁」（ジュース）が習得された。

食べ物の次に、身体に関する名詞が5個習得され、体の部分の「頭」、「耳朵」（耳）、「鼻孔」（花の穴）、「下巴」（顎）の体の部分や身体の排泄物の「涕」（鼻水）である。体の部分に対する知覚は身体名詞を習得する心理基礎となり、そして大人からの頻繁な教授はL児の身体名詞の学習を促進していると考えられる。

衣類、自然、乗り物、家具や部屋、家庭用品、動物、形状などカテゴリの意味概念は少なく、わずかの個数にとどまっている。第4期において車の下位概念の「警车」、「摩托车」を習得し、車のカテゴリ構成が豊富になる。そして、L児は初めて形状を表す「圓」（円）という抽象的な概念を理解し、積み木で作った丸い形或いは庭園の石柱の上の飾りボールを「圓」で表現した。

2.2.2 名詞の発音発達

ことばを介して意味伝達が実現するには、コミュニケーション同士が理解できる共通言語と正しい発音が前提となる。同じ言語でも発話が音的に識別されなければ、交流がスムーズに進行できない（例えば、普通話しか話せない中国北方の人は中国南方のある村に行くと、方言しか話せない村の人とコミュニケーションを取ろうとする場面を想像してください。こ

の場合、双方は同じ中国語で話しても、発音が全く異なるため、お互いのことばを理解できず、会話が成り立たない)。幼児の発話においても意味伝達の効率は幼児の発音がどの程度成人言語の発音と近似するかに大きく左右される。しかし、幼児はいきなり成人言語の発音に達することができず、言語発達初期の発話は自然的に発生し、成人言語の発音規則に即しないことは普遍的な現象である。言語学習の基礎内容といえる発音がいかなる過程を経て成人言語の発音に近づくのか。発音規則はどのように習得されるのか。以下では、まずL児が習得した名詞の音節タイプ及び各時期の音節分布について概観し、そして各時期の発音状況を詳しく記述し、発音変化の具体的過程を追跡することより、これらの問題を解く。

(1) 発音パターンと各時期における分布

2才1ヵ月までに現れた名詞の発音タイプ及び各時期における名詞の発音状況を表8のように示すことができる。

L児が習得した名詞の発音は音節数により、単音節、重複音節、二音節及び二音節以上の4つの発音パターンに分ける。発音の全体から見れば、単音節は習得度が一番高く、64個あり、全体の112個の半分以上を占める。重複音と二音節とも多数習得され、それぞれ23個と22個であり、2割近くを占める。二音節以上の発音の習得度は最も低く、3個しかない。発音の習得順番から見れば、最初は単音節と重複音節、次に二音節、そし

表8 2才1ヵ月までに発音の発達 (個数/比率%)

発音パターン	第1期 (1:07:20 ～1:09:07)	第2期 (1:09:08 ～1:10:26)	第3期 (1:10:27 ～2:00:12)	第4期 (2:00:13 ～2:01:29)	合計 (2)
単音節	6/54.5	7/46.7	37/63.8	14/50.0	64/57.1
重複音節	5/45.5	7/46.7	11/19.0		23/20.5
二音節		1/ 6.6	8/13.8	13/46.6	22/19.6
二音節以上			2/ 3.4	1/ 3.6	3/ 2.7
合計 (1)	11/100	15/100	58/100	28/100	112/100

て二音節以上の順番で発達していく。第1,2期において習得した名詞はそれぞれ11個と15個で、数は少ないが、第2期に現れた1個の二音節を除き、発音は単音節と重複音節の二つのパターンで、それぞれ半分くらい割合を占める。第3期では、語彙量の爆発的増加に伴い、発音の構成にも大きな変化が見られる。単音節は急速に増加し、37個が新しく習得され、一番多い発音パターンである。二音節は第2期において1個が現れ、第3期ではさらに8個が習得され、二音節以上の多音節も現れ始めた。第4期に入ると、2音節が大量に出現し、L児の発音能力が一段階向上した。名詞の個数は前の第3期の半分にも及ばないが、2音節が13個あり、第4期の発音の50%を占め、対象期間内における2音節の半分以上を超える。これまで二音節に対して音節変化を行った（後述の各自時期における発音の習得を参照してください）が、第4期でL児はこれらのような二音節を正確に発すようになった。このような単音節や重複音節より二音節や二音節以上の発音が遅れ、そして単音節が高い習得率を占めることは、複数の音節の同時操作は相当の調音能力が求められ、発音器官が未熟である言語発達初期の幼児にとって、単音節や重複音節は相対的に容易ではないかと考えられる。そして、音節や二音節以上が変わったあとの発音は一見間違いだと思われるかもしれないが、このような音節変化の戦略は意味を部分的に伝達することができ、コミュニケーションのときに非常に役立つ。意味がないように思われる独自の発音練習を重ねて、L児の調音能力が発達し、だんだん二音節や二音節以上の複雑な発音へ移行する。

(2) 各時期における発音の習得

幼児は初めてある音声と特定意味の対応関係を認識し、そして発声を介して周囲の人とコミュニケーションする。意味を持つこのような発声を最初の語彙と見做すことができる。第1期における名詞の発音分布を表9の

ように示すことができる。

発音器官が未熟で、認知能力も限定される第1期において名詞の発音パターンは非常に単純である。第1期で習得した11個の名詞はすべて単音節或いは重複音節で、二音節や二音節以上は一つも現れなかった。単音節に「球」「尿」など、重複音節に「妈妈」「爸爸」などが挙げられる。これらの名詞はLが日常生活で頻繁に接触する物や人を表し、発音も相対的に簡単である。

L児が自ら創造的に発音を変えた名詞は「泡泡」(泡沫)と「包包」(面包)があり、いずれも二音節の前音節或いは後音節が重複された。例えば、ハンドソープの泡をいうことで母親にハンドソープを求めたときに、「泡沫」の前音節を重複し、「泡泡」で表した。また、パンを求めるときに、「面包」の後音節を重複した「包包」で表現した。このような場合、L児は自己欲求を他人に伝えようとするが、二音節の調音が難がしいため、重複音節化のストラテジーを用いた。二音節の前音節或いは後音節を重複した重複音節はL児にとって比較的発音しやすい。

重複音節化によって発音を部分的に変える一方、L児は「gaga」というまったく新しい単語を創造した。L児はこの「gaga」の発音で好きな肉おかずを表す「肉」に名前を付けた。大人は改めてL児のことは訂正しなかったため、「gaga」が単語として定着し、長い間にL児は「gaga」で肉

表9 第1期(1:07:20~1:09:07)の発音習得

音節		語彙	個数	合計
単音節		球 尿 酒 鳥 草 樹	6	11
重複音節	無変化	妈妈 爸爸	5	
	前音節重複化	泡泡 (泡沫)		
	後音節重複化	包包 (面包)		
	その他	gaga (肉)		

おかずを指したり大人に肉おかずを求めたりした。このようなL児の発音は成人の発音と大きく異なる場合、L児と一緒に生活する家族だけはある程度L児の発話を理解することができる。

表10が示すように、第2期においてL児が習得した名詞は第1期より少し増えたが、発音パターンは殆ど変わらない。名詞の発音は殆ど単音節や重複音節で、二音節の単語は動物を表す「老虎」しかない。単音節の名詞に動物を指す「猪」「马」、重複音節の名詞に天体を指す「星星」がある。そして、L児は依然として重複音節化のストラテジーを頻繁に用いた。二音節の「袜子」の前音節「袜」、「萝卜」の後音節「卜」を重複し、「袜袜」「卜卜」に変えた。重複音節化も単音節の名詞に拡大使用し、「狗」「笔」「车」などを発音しやすい重複音節の「狗狗」「笔笔」「车车」に変えた。また、発音がさらに困難な3音節単語の「大猩猩」は前音節「大」が取られ、「猩猩」の重複音節に省略された。

第3期に入ると、語彙量の増加に伴い、発音パターンの種類や発音パターンの分布などには新しい変化が見られる。

(1) L児が習得した58個名詞の発音に単音節が一番多く、37個あり、半分以上を占める。その中に、「花」「飯」「水」など発音がもともと単音

表10 第2期 (1:09:08~1:10:26) の発音習得

発音	発音変化	語彙	個数	合計
単音節	無変化	猪 马 虫 羊 书 鞋 脚	7	15
重複音節	無変化	猩猩	7	
	単音節重複化	狗狗（狗）笔笔（笔）车车（车）		
	前音節重複化	袜袜（袜子）		
	後音節重複化	卜卜（萝卜）		
	前音節省略	猩猩（大猩猩）		
2音節	無変化	老虎	1	

表 11 第 3 期 (1:10:27~2:00:12) の発音習得

発音	発音変化	語彙	個数	合計
単音節	無変化	花 饭 水 鸡 汤 天 门 纸 伞 面 鱼 灯 盆 糖 车	37	58
	前音節省略	龙 (恐龙) 果 (苹果) 象 (大象) 鼠 (老鼠) 米 (玉米) 蛋 (鸡蛋) 薯 (红薯) 菜 (青菜) 菇 (蘑菇) 莓 (草莓) 栗 (板栗) 机 (飞机) 阳 (太阳) 包 (书包) 镜 (眼镜) 雀 (孔雀)		
	後音節省略	饼 (饼干) 杯 (杯子) 地 (地上) 裙 (裙子) 被 (被子) 裤 (裤子)		
重複音節	無変化	奶奶 中中 爷爷 姐姐 哥哥 伯伯	11	
	単音節重複	水水 (水)		
	前音節重複	狮狮 (狮子) 冰冰 (冰激凌)		
	後音節重複	蕉蕉 (香蕉)		
	その他	甜甜 (药水)		
2 音節	無変化	八哥 骆驼 轿车 牛奶 卡车 垃圾 豆腐 冰箱	8	
多音節	無変化	甜甜圈	2	
	その他	hua da da da da ti (滑滑梯)		

節である 15 個の語彙を除き、他の 22 個のはいはすべて二音節の名詞の発音が省略されたものである。「恐龙」「苹果」「大象」の前音節を省略し「龙」「果」「象」などに変えた単音節は 16 個あり、「饼干」「杯子」「裙子」の後音節を「饼」「杯」「裙」(スカート)に変えた名詞は 6 個ある。発音困難な二音節の前音節または後音節が省略されたあとのこれらの単音節は幼児にとって比較的発しやすいと考えられる。

(2) 名詞の発音に重複音節は 11 個あるが、「奶奶」「爷爷」「伯伯」など発音がもともと重複音節の親族呼称が多く、音節変化が行われた重複音節は少ない。単音節の「水」を重複した「水水」、二音節の「狮子」(ライオン)「冰激凌」の前音節や「香蕉」の後音節を重複した「狮狮」「冰冰」

「蕉蕉」がある。そして、成人言語に存在しない「甜甜」（甘い）はL児が家庭内の言語使用習慣の影響を受けて習得した単語である。L児の父親が薬のシロップをL児に飲ませるために、薬のシロップを「甜甜」と呼ぶことでL児に薬のシロップが甘くて美味しいことを強調した。L児が父親のことはを真似し、その後ずっと「甜甜」で薬のシロップを指した。

第4期では、L児は多語文を発することができないが、単語を連続的に発した発話が初めて観察された。このような構文化の段階への移行は構文能力だけではなく、発音の能力も反映している。第4期における名詞の発音分布から発音能力の変化はさらに明らかである。

(1) L児が新しく習得した名詞の発音はほとんど単音節や二音節であり、それぞれ全体の半分近くを占める。二音節以上の単語では三音節の「摩托车」しかない。

(2) 発音困難な二音節に対して、L児は音節重複化よりむしろ音節省略のストラテジーを使用し、二音節を単音節に変えた。興味深いのは単独で具体的意味を持たない「子」という接尾詞の音節はほとんど省略された現象である。例えば、「子」の接尾詞を持つ「茄子」「兔子」などが「茄」「兔」に省略。それは、L児が音節「子」を省略しても語彙の意味が変わ

表 12 第4期（2:00:13～2:01:29）の発音習得

発音	発音変化	語彙	個数	合計
単音節	無変化	云 钱 头 圆 肉	14	28
	前音節省略	汁（果汁）柿（西红柿）涕（鼻涕）		
	後音節省略	茄（茄子）兔（兔子）勺（勺子）帽（帽子） 窗（窗子）房（房子）		
2音節	無変化	围兜 鸡蛋 豌豆 阿姨 耳朵 苹果 香蕉 鼻孔 下巴 沙子 枕头 桔子 警车	13	
多音節	無変化	摩托车	1	

らず、大人の理解を妨げないことが分かるためか。或いは、声調を失った「子」を聞き取れないがためかのどちらになる。

(3) 二音節の発音を見ると、L 児の発音は質的に変化していると考えられる。L 児は「阿姨」「鼻孔」など新しい二音節名詞のほか、今まで音節省略を行った「蛋」「果」などの発音を正確な「鸡蛋」「苹果」などに修正した。L 児の二音節や二音節以上の習得過程は幼児がワンステップでいきなり大人の発音に達することではなく、段階的に発達させるという学習規則を端的に示している。

以上名詞を巡る発音パターン、各時期にける発音パターンの分布を分析し、音節変化の具体的過程を考察した。語彙発達初期段階において、名詞の単音節や二音節が重複音節化された発音を含む重複音節が早い時期から頻繁に現れた。日本幼児でも言語発達初期に「くっく」「じーじ」など音韻反復の幼児語を大量に使用する現象が観察される⁵⁾。L 児の重複音節と一見発音形式は似ているが、両者の区別は幼児語が教えられるのか、または自然に現れるのかという点にある。擬声語・擬音語などを含む日本語のオノマトペは一つの体系として定着し、育児語として養育者は日本人幼児に対して積極的に使うため、日本人幼児の幼児語は学習されるものだと思われる。中国人親の幼児語使用は家庭内の言語使用習慣によってそれぞれ異なるが、決して日本人が持つ幼児語の語彙量のほどではない。L 児の場合では、大人に教えてもらわなくても自ら重複音節を大量に発した。このことは重複音節のような幼児語は成人に影響を受けるものではなく、自然に形成するものを示している。20 世紀の言語学者ヤコブソン (1965) は「mama」「papa」などのようなタイプな幼児語の本質について論じた。彼によれば、反復は言語行動に移行する段階において、喃語と対照的に、音素の認識や区別や同定の要請に応じて、気に入りの手法として現れた言語単位で、言語的に本質である。幼児言語発達の特性と一致していること

こそ、このようなタイプな幼児語が国語に浸透し、さらに国際的幼児語として普及していると彼は主張した。ヤコブソンが指摘したように、L 児の中国語に見られる重複音節も言語的に本質であり、幼児の言語発達特性に一致しているといえよう。

2.3 動詞の発達

生物としての人間は生存、発展するために、人間自身或いは外部世界に対して意識的に無意識的に様々な行動を起こし、そして日常生活の中で外部世界に存在する事物の動作や状態の変化も経験する。言語の中で、こういったような動的な経験を最も表現できるのは動詞である。幼児期の早期段階において、身体を使う自発的な行動や基本的な生活活動といった生理的発達、そして外部世界の運動や変化に対する認識という認知的発達を L 児の動詞の習得過程から窺えることができる。2才1ヵ月までに L 児が習得した動詞をカテゴリによって整理すると、表3のようになる。

2才1ヵ月までに L 児が習得した動詞は合計 50 個あり、意味概念によって身体動作、生活活動、変化、心理活動、生理現象、自然現象の6つのカテゴリに分けられる。

身体動作のカテゴリに属する動詞の概念は一番多く習得され、22 個ある。幼児は成長に伴い、体の部分を感じ取る知覚的能力が発達し、そして自発的に行動しようという意識が段々形成したあとに、身体を操作し自ら動作を起こすようになる。様々な身体動作を起こす際に用いられる体の部分が違い、それぞれの動作に対する知覚も異なると考えられる。L 児は上肢で起こす動作を最も認識し、上肢運動にも優れている。例えば、直接に手で起こす空手動作には人を叩く「打」、傷を搔く「抠」、ゆで卵の殻を剥く「剥」など 10 個あり、道具を操る手部動作にはティッシュで濡れているテーブルを拭く「擦」、保湿クリームを手塗る「塗」、救急バンを貼る

表 13 2才1ヵ月までに動詞の発達

カテゴリ		語彙	個数	合計
身体動作	人体動作	爬 / 走 跑 追 / 咬 喝 吃 / 打 抠 剥 开 ₁ (打开) 盖 关 推 拿 堆 排 / 擦 涂 贴 切	22	49
	動物動作	飞		
生活活動	文体活動	画画	15	
	日常活動	玩 / 洗澡 撒 / 穿 換 / 煮		
	交際活動	等		
	移動活動	停 ₁ / 到 来 / 下去		
	使用活動	开 ₂ 停 ₂ 彎 (转彎)		
変化	存在變化	完 没有 ₁ / 有 / 没有 ₂	6	
	位置變化	掉		
	質變化	坏		
心理活動	感情	怕	3	
	認知	看 / 听		
生理現象	生理	(撒) / 破 晒	2	
自然現象	音声	叫	1	

「貼」、ゆで卵を角切る「切」の4個ある。そして、L児は早い時期から食事の「咬」(噛む)、「吃」(食べる)、「喝」(飲む)などの口部動作や「走」(歩く)、「跑」(走る)、「追」(追いかける)など下肢で移動する下肢動作を習得した。移動速度が異なる移動動詞では、L児は「走」「跑」「追」を使い分ける。「追」は一方的に参加ではなく、双方の参加者の協力を求める遊びで、L児は他人と共同遊戯への欲求を初めて言語で表現した。また、「爬」(ハイハイする)はL児自身がハイハイする動作を指し、この動作で大人の注意を喚起する。「飞」(飛ぶ)は人間ではない生命体の行動を表す動詞で、具体的に鳥類が空を飛ぶことを指す。

生活活動のカテゴリに属する動詞は19個あり、具体的な体の動きより

飲食、着替え、遊びなどのような日常生活で行われる不可欠な行為を指す。例えば、日常生活で繰り返している活動には遊びの「玩」、お風呂やシャワーの「洗澡」（お風呂に入る）、排尿の「撒」（おしっこする）、着替えの「穿」（着る又は履く）、「換」（替える）及び調理の「煮」（煮ることを含み、食べ物を加熱することを指す）などが挙げられる。位置変化が伴う移動活動には、L児は歩いている途中で通る車を譲るために歩道の端に寄りながら言った「停₁」（停まる）、バスが近づいて来ることを表す「到」（着く）や「来」（来る）がある。L児は椅子から降りようとしたときに「下」（降りる）で大人の助けを求める。L児は車に高い関心を示し、車の動きにも敏感である。L児は「到」、「来」で車の接近の動きを表すほかに、「开₂」でお母さんに運転を促したり、「停₂」（停める）で車を停めることを指したり、或いは車の左折や右折を「彎」（曲がる）で表したりする。そして、「等」（待つ）はバス停でバスを待つことを指し、L児がバスの到着を期待するという心理的活動を反映している。

人や物の状態の変化のカテゴリには存在変化、位置変化と質変化の三つの下位カテゴリに分けられる。「完」（終わる）はL児が一番早く習得した動詞で、消失を表す。食事の場合、L児は「完」で食べ物を食べ切れること大人に知らせ、食べ物の追加を求める。「没有」が習得されたあと、「没有」で食べ物がなくなったことを表すようになる。例えば、大人から「米饭还有吗？」（ごはん、もう食べたの）の質問に対して、L児は「没有」を用いて答える。さらに「没有」の意味概念が拡大し、L児はお父さんが家にいないことを表す。存在の「有」より非存在の「没有」が早く習得されるのことは、摂食欲求という生物の基本欲求を満足するために、「没有」がより重要な伝達機能を持つと考えられる。食べ物があるときに満足しているために対し行動する必要がないが、食べ物がないときに欲求を大人に伝える必要性が生じるではないか。この摂食欲求の動機付けによ

って、L児はもう一つの動詞「掉」（落ちる）を習得した。テーブルから床に落ちた食べ物を再び取得するために、大人に拾得の要請や依頼を伝える必要も生じる。この場合、L児は「掉」で表現した。そして、ものの質変化の概念には「坏」（壊れる）が習得された。L児はおもちゃの車が壊れた際に、「坏」でを人に知らせ、同時に不満や怒りを訴える。

心理活動には感情を表す「怕」と認知活動を表す「听」（聴く）「看」（見る）の三つある。「怕」は暗い場所を怖がるというL児のネガティブな感情を表す。恐怖の感情は人間が安全を求めるための本能的な反応である。L児の場合は「怕」で母親にこのような恐怖の感情を伝え、保護を求める。「听」は音楽を聴くことを表すに対して、「看」は電子写真を見ることを表す。L児はこれらの聴覚動詞や視覚動詞を介して、自発的に外部情報を認識する欲求を訴える。

生理現象の概念には「撒」、「痛」（痛い）、「晒」（日焼けする）の三つの動詞がある。「撒」は本能的な排尿反応であり、L児は「撒」で大人に排尿のことを知らせ、おむつの交換を求める。そして、L児は傷などで体が痛い感覚を「痛」、強い太陽光で皮膚が焼けることを「晒」で不愉快を表した。

自然現象には、L児はもう一つの車に関する音声現象の「叫」を習得した。パトロールカーや消防車がサイレンを鳴らすときに、L児は「叫」で大人の関心を引く。

以上述べたL児の動詞に現れた大量な身体動作や生活活動の概念はいずれも物理的身体の経験を基盤とするものであると思われる。L児は自己の身体を認識の手段として、自己の身体を探索しながら、身体と外部事物との相互作用を認識してきた。そして、「完」「没有」「掉」「坏」「怕」「破」「晒」が表す状態や生理現象は不愉快な経験で、常にL児のマイナス感情が引き出される。大人の援助を得て現状を改善する欲求はL児が

これらの動詞を習得する動機と付けられる。

2.4 他の品詞の発達

2才1ヵ月までL児の語彙は名詞と動詞の発達が中心であったが、名詞と動詞と同じく早い時期から少数の形容詞、擬音詞⁶⁾や間投詞⁷⁾が習得され、さらに個別の代詞と数量詞も現れた。これらの少数の品詞は名詞と動詞とともに、L児の語彙の品詞構成を全体的に反映するものだけではなく、言語習得の根本規則を見出すために、名詞と動詞の比較対象を提供することができる。そして、将来これらの品詞の発達過程を追跡するために、最初に現れた語彙を正確に記述することは極めて重要だと考えられる。2才1ヵ月まで名詞と動詞を除く形容詞、擬音詞など5つの品詞は表14の通りである。次では、各品詞の具体的単語を提示しながら、単語の意味特徴概念や習得状況を説明したい。

表14が示すように、L児は5つの品詞についての語彙を合計25個習得した。その中、形容詞は比較的によく、9個である。そして、間投詞を7個、擬音詞を6個習得した。代詞と数量詞は少なく、それぞれ2個と1個である。

(1) L児が習得した形容詞は人の感覚を表す感覚形容詞と事物の性質や

表14 2才1ヵ月まで他の品詞の発達

品詞	語彙	個数	合計
形容詞	烫 臭 苦 冷 大 小 湿 饱 一样	9	25
擬音詞	汪汪 嘎嘎 呜呜 咚 轰轰 啪	6	
間投詞	咦 嗯 喂 哇 嘘	5	
	再见 谢谢	2	
代詞	这个 这样	2	
数量詞	一个	1	

状態を表す属性形容詞の2種類に分けられる。感覚形容詞には、温度に対する感覚の「烫」(熱い)「冷」(冷たい)、匂いや味に対する感覚の「臭」(臭い)「苦」(苦い)、そして生理感覚の「飽」(おなかがいっぱい)がある。1才8ヵ月にL児は「烫」と「臭」を習得した。L児はお風呂のときに、L児は熱いお湯で皮膚が痛い感覚を「烫」で表現し、大人に文句や不満を言った。おむつを替えたときに、L児は汚れたおむつが入った箱を指しながら、その箱が臭いことを「臭」で表現し、嫌悪な顔をした。1才11ヵ月にL児は「苦」を習得した。L児はコーヒーを味見した経験があり、その際に大人に苦い味を「苦」と教われた。その後、大人がコーヒーを飲むのを見ると、L児はコーヒーガップを指しながら「苦」を言い、コーヒーが苦いか、それが苦いコーヒーであるかのどちらかを意味した。2才0ヵ月にL児は「冷」を習得し、風が顔に吹き付けて冷たいと感じたときに、「冷」で不快感を表した。同じ年齢で、食事の場面で母親がさらに食べさせようとしたときに、L児は「飽」でお腹がいっぱいという感覚を表し、食べ物を拒否した。感覚形容詞と比べて属性形容詞の出現はかなり遅れて、2才0ヵ月に物の体積を表す「大」(大きい)「小」(小さい)、湿度を表す「湿」(濡れている)、そして事物間の類似性を表す「一样」(同じ)の4つが習得された。L児は物体の外形について認識したあとに、二つのボールの中に体積が比較的に大きいのを「大」、小さいのを「小」で表現した。そして、L児はおむつがおしっこで濡れている状態を「湿」で表現し、大人におむつの交換を求めた。また、L児は参照や比較の能力を用いて事物間の関係を認識し初め、二つの事物間の類似性を表す「一样」を習得した。L児は車道に走行しているバスとおもちゃのバスは形が同じであることに気が付き、「一样」で表現し、驚きを表した。

(2) 擬音詞に関して、語彙数は少ないが、習得は最も早かった。1才7ヵ月でL児は動物の鳴き声を表す「汪汪」「嘎嘎」で犬とアヒルを指した。

「狗是怎么叫的？」（犬は何んて言ってるの）の質問に対して、L児は「汪汪」で犬の鳴き声を模倣して反応した。また、実物の犬或いは犬の絵を「汪汪」で指したこともよくある。1才8ヵ月で機械の響きを表す「呜呜」を習得した。車を動作するときに、L児はエンジンをかけるときの音を模倣し、「呜呜」を発した。1才10ヵ月で動作の音を表す「咚」「啪」を習得した。「咚」は頭が壁にぶつかったときの音の模倣である。「碰到哪里了？」（どこ、ぶつけたの）と聞かれたときに、L児は頭を手で触りながら「咚」で大人に言った。「啪」はお尻を叩く音である。悪いことをしたときにお尻を叩くふりをした。物を壊したことで大人に叱れるときに、お尻を叩きながら「啪」を発した。同じ月齢でL児は「轰轰」でいびきの音を模倣していた。以上のように、L児は動物の鳴き声、機械の響き、動作の音、人の声を模倣した。一方、事物の状態を表す擬態詞は一つも現れなかった。擬音詞の意味対象である音や声は聴覚で直感しやすいため、幼児は擬音詞の発音と実際の音や声の類似性を連想の手がかりにして、擬音詞を音や声と対応し学習しやすい。それに対して、擬音詞は意味的に複雑で、意味と発音を連想することが相当難しい。発音においても、擬音詞は基本的に3音節以上（例えば、キラキラしている様子を表す「亮晶晶」、や焦ずにゆっくりしている様子を表す「慢慢悠悠」など）の複雑な発音となるため、学習も相対的に困難である。また、も一つの可能性として、口語において擬態詞の使用頻度がかなり低いことが考えられる。

(3) 間投詞には感動、返事、呼びかけの際に無意識に出る声を言語化したものや挨拶を表す特定の言語形式などが含まれる。L児が不満、驚き、注意喚起、命令、呼びかけを表す発声や挨拶表現を間投詞として捉えることはできる。1才7ヵ月で何かに対して不満を表すときに、「咦」の尖った声を発した。また、食べ物の提供の可否について意見を尋ねる際に、「嗯」（ううん）の軽い声で同意の返事をした。1才10ヵ月で電話会話に

用いられる呼びかけの「喂」(もしもし)を習得した。二日後に、何かを見つけたときに大人の注意を喚起ために、驚きの様子をしながら「哇」を言った。L児はよくおもちゃの電話で遊び、電話を耳にかけながら「喂」を言った。それから、2才0ヵ月でL児は指を口に当てて、「嘘」(シー)の声を発しながら、静かにすることを命令した。1才11ヵ月で祖母とビデオ通信が終了する際に挨拶語の「再见」(さようなら)を初めて用いて別れの挨拶をした。1才11ヵ月に「谢谢」(ありがとうございます)が出現したが、L児は「谢谢」が最初に感謝の気持ちを表すことを正確に理解しているかには疑問がある。物のやり取りの場面において、L児は自分がものを渡す方かものを受ける方かを区別せずに、両方の場合でも「谢谢」と言った。

(4) 代詞について、L児は「这个」(これ)、「这样」(このように)の二つの指示代詞を習得した。指示代詞は指示対象の範囲が広く、事物、様態、事件など殆どの意味概念を表すことができる。指示代詞によって、言語伝達が経済的に行われるほか、L児は名前の知らないものやこと関しても、指示代詞を通して意味伝達を容易にした。1才7ヵ月でL児は食べ物やおもちゃを求めるが、それらの名前が知らない。この場合、L児は指で物を差しながら「这个」で大人に要求を伝える。動作の過程や物事のやり方を少し理解するようになると、L児は2才1ヵ月で「这样」を習得した。食事のときに、大人はスプーンの正しい持ち方を「勺子是怎么拿的?」(スプーンはどやって持つの)と尋ねた。L児は言葉ですべての意味を表すことが困難であるが、「这样」を言いながら動作で模範を示した。

(5) 数量詞について、L児は「一个」しか習得しなかった。数詞の「一」は計数体系の中で最も簡単な概念で、物によって数える単位が異なり、「个」の使用範囲はかなり広い。L児は実際の数や物の種類を問わず、「一支笔」(1本のペン)、「一个玩具」(一つのおもちゃ)、「一块饼干」(一

枚のクッキー)などをすべて「一个」で表す。この時期において、計数能力が未発達で、複数の概念や単位をの概念を理解していないことが分かる。

これらの品詞の語彙数は名詞と動詞に遠く及ばないが、感覚や聴覚を通して認識やすい感覚形容詞や擬音詞は多数が習得された。参照能力及び計数能力など高い知力を要する代詞や数量詞は個別の単語にとどまっている。

2.5 日本語語彙の発達

以上では中国語の語彙の発達を中心に考察した。L児は二言語環境に置かれており、中国語と接触する機会が多かったが、日本語は全く発達していないというわけではない。中国語習得が先行する中、L児の日本語がどの程度発達しているかが大変興味深い。1才7ヵ月から2才1ヵ月の日本語の語彙データを表15、16のように示すことができる。

中国語の語彙数は184個であるのに対して、日本語の語彙数は21個しかない。全体的に、日本語の発達は中国語よりはるかに遅れていることが分かる。以下では、品詞別に日本語の語彙発達を記述する。

(1) 間投詞について、日本語では9個あり、中国語より多い。驚き・喜びのときに自然に出る声を表す「ばあー」「よっしゃ」「イエー」「キャッー」「いないいないばー」、応答を表す「はい」「ううん」、挨拶の言葉「バ

表15 2才1ヵ月までに日本語の語彙の発達(年齢別)

年齢	語彙	個数	合計
1:09	ばあー ブーブー	2	21
1:10	バイバイ はい いないいないばあー よっしゃ ニャンニャン 痛い ビービー	7	
1:11	イエー ダージョ	2	
2:00	タッチ アンパンマン ワンワン あった ない	5	
2:01	バピ キャッー 葉っぱ にんじん ううん	5	

表 16 2才1ヵ月までに日本語の語彙の発達（品詞別）

品詞	語彙	個数／比率%	合計
間投詞	ばあー いないいないばあー バイバイ はい よっしゃ イエー ダージョ キャッター ううん	9/42.9	21/100
名詞	タッチ アンパンマン バピ 葉っぱ にんじん	5/23.8	
擬音詞	ブーブー ニャンニャン ビービー ワンワン	4/19.0	
形容詞	痛い ない	2/ 9.5	
動詞	あった	1/ 4.8	

イバイ」「ダージョ」である。保育園に入園した約1ヵ月後の1才9ヵ月11日に、L児は初の日本語を表出し、間投詞の「ばあー」で驚きを表した。保育士たちは「いないいないばあー」の遊び言葉に合わせて、物を隠したり見せたりするという幼児遊びを行っている。L児は家でもこの遊びをしながら、遊び言葉の最後の「ばあー」だけを言った。1才10ヵ月になると、長い文の「いないいないばー」を発せるようになった。同じ年齢で、L児は階段を登るときに力を入れながら「よっしゃ」を表出した。1才11ヵ月で降園のときに、保育士とタッチしながら「イエー」を言った。また、外で走るときに興奮して「キャッター」を発した。名前が日本語で呼ばれたときに、「はい」で返事する。また、意見を尋ねるときに「ううん」で同意を表す。1才10ヵ月6日に降園のときに保育士と友たちに「バイバイ」で別れの挨拶をした。それに対して中国語の「再见」の出現は遅れており、1才11ヵ月27日に祖母とのビデオ通信が終了するときに、挨拶表現として使用された。物を他人にあげるときに、「ダージョ」を言った。応答を表す「はい」と丁寧な気持ちを表す「ダージョ」と同じ意味での中国語の「到」「请」などを習得していない。日本人は家庭内においても家庭外においても「はい」「ダージョ」を慣習的に使用するが、中国人では家庭内において「到」「请」を殆ど使わない。さらに、L児は中国で家族

以外の人と接触が少ないため、「到」「請」の習得は当然遅いだろう。一方、家庭内において父母はL児に対して日本語を使用しないが、L児は日本の保育園の集団生活をきっかけに「はい」「ドージョ」の応答表現や挨拶表現を習得した。

(2) L児は動作を表す「タッチ」を初め、それからキャラクターを指す「アンパンマン」と物

を指示する「バピ」「葉っぱ」「にんじん」など日本語の名詞を5個習得した。2才0ヵ月でタッチの身振りを保育士に求めた後に、保育士と手を軽く触れながら「タッチ」を発した。それから、L児は「アンパンマン」で幼児向けの絵本に登場人物であるアンパンマンを指した。また、「バピ」でバスやおもちゃのバス、「葉っぱ」で地上の落葉、「にんじん」を野菜のにんじんを表した。これらの名詞の概念を日本語によって初めて表出した。

(3) 擬音詞について、L児は動物の鳴き声と機械の響きを表す日本語の語彙を習得した。動物の鳴き声を表す擬音語では、1才10ヵ月で猫を「ニャンニャン」、2才0ヵ月で犬を「ワンワン」で指した。「ワンワン」を発する際に、中国語の「汪汪」と異なり音素間のポーズがない。機械の響きを表す擬音語では、1才9ヵ月で車を「ブーブー」、1才10ヵ月で体温計を「ピーピー」で指した。車を日本語の「ブーブー」で指すことに対して、L児はすで「呜呜」で車のエンジンをかけるときの音を直接に模倣した。

(4) 動詞については、存在と非存在を表す「あった」「ない」を習得した。中国語の「有」で「～有没有」の質問に対して答えるが、日本語の「あった」は何かを見つけたときに用いられる。中国語の「痛」を先に習得したが、日本語の「痛い」を習得した後に「痛い」を頻繁に表出した。

3. 終わりに

本稿では発音、品詞、意味概念の三つの言語項目に焦点を絞り、L 児の語彙発達について記述や考察を行ってきた。L 児の語彙発達特徴を次の 4 点にまとめられる。

(1) 二言語能力の比較

2 才 1 ヶ月までに L 児の語彙能力は中国語が日本語をはるかに超え、中国語の語彙量が圧倒的に多く、そして中国語の品詞種類のほうがより豊かである。このような二言語能力の差は二言語のインプット量の不均衡によるものと考えられる。L 児は主に自宅保育で、家庭内の中国語環境との接触機会が日本語環境より多いため、家族や親族などから大量な中国語のインプットが L 児の中国語の語彙学習を促進していた。一方、日本語の擬音詞や挨拶表現など個別の表現は早い時期から習得されている。日本語の擬音・擬声詞などは幼児語の体系とし定着しており、日本人は子育ての中に幼児に対して大量の幼児語を使うことが普通な現象である。中国語では幼児語の使用習慣は殆どなく、方言の中に少数の幼児語があるが、決して日本語のほどの量ではない。このような日本語自体の特徴の影響を受け、L 児は保育園で保育士とのコミュニケーションの中で自然に日本語の幼児語を習得した。そして、挨拶表現の習得は日本の生活経験の影響を受けている。中国での集団生活の経験がないのに対して、L 児は小さい頃日本の保育園に入ったため、個別の日本語の挨拶表現の習得は早い。

(2) 発音の特徴

L 児は多音節より単音節や重複音節のほうが学習しやすい傾向を示した。

第2期までにL児の名詞は殆ど単音節や重複音節或いは音節変化を経てそれらに変わったものである。語彙産出の早い段階にL児の発音器官が未熟で、複数の音節を同時に調節することは困難である。L児は発音困難な二音節や二音節以上の単語で意味伝達を図るために、単音節化（例えば、「苹果」「老鼠」を「果」「鼠」に変えた）や重複音節化（例えば、「面包」「香蕉」を「包包」「蕉蕉」に変えた）による音節変化を行い、比較的発音しやすい単音節や重複音節でコミュニケーションを実現させた。発音器官の成熟とともに、L児は発声練習を重ねて二音節を発するようになったら、音節変化がされた名詞を段々正確な発音に訂正してきた。

(3) 意味概念の特徴

L児は具体的で接触度が高い意味概念及び意味伝達に必要性が高い概念を優先に習得する。品詞習得度を見ると、名詞、動詞、形容詞、擬音詞、代詞、数量詞の順番となっている。名詞は殆ど実在の具体的な人やものを表し、意味概念が簡単で理解しやすいため、習得度が一番高い。L児の語彙発達に見られる名詞優位は大掠（2007）の結論と一致している。ただ、日本人幼児が名詞の次に、形容詞を多く習得することは、L児の結果と一致していない。そして、擬音・擬声詞は音声をそのまま表現し、意味が簡単で、習得も相対的に早い。それに対して、動詞や形容詞などの品詞は事物間の関係或いは性質など抽象的な意味概念であり、習得度は相対的に低い。呉天敏・許政援（1979）でも中国人幼児が具体的な意味概念から抽象的な意味概念へ習得していくと指摘した。特に参照能力、計算能力などの高い認知能力を要する代詞、数量詞などはごく少数の単語に限り、これらの個別の単語はコミュニケーションの実現に必要性が高いと考えられる。これらの品詞は意味概念の抽象度が高く、そして相当な構文能力が必要だと考えられる。カテゴリーの構成員から見ると、日常生活の中で接触頻度が高い意

味概念の習得は相対的に早い。例えば、L児は先に家族呼称（例えば「妈妈」「爸爸」）、次に親族呼称（例えば「奶奶」「爷爷」）、最後に社会呼称（例えば「哥哥」「阿姨」）を習得する。朱（2001）でも、接触頻度が呼称名詞の習得に影響を与えると結論つけた。また、飢餓、恐怖、痛みなど本能的でマイナス感情が引き出されたときに、現状を改善する欲求を伝える必要性が高いため、L児は食べ物の非存在（例えば「完」「没有」）、不快感（例えば「晒」「烫」「冷」）などの意味概念を早く習得する。

(4) 言語習得の創造性

模倣は重要な学習手段であり、L児にとって成人のインプットは言語学習の重要な資料と見なせる。しかし、L児は単に成人のことばを真似するではなく、発音や意味概念の発達過程においてL児の言葉に大量な創造的な部分が見られる。例えば、難しい音節を習得する際に、音節省略や音節重複のような音節変化によって、L児は成人言語の発音と部分的に異なる発音を創造した（例えば、L児は「香蕉」「苹果」「大猩猩」を「蕉蕉」「果」「猩猩」に変えた）。さらに、関心を持つ物事の名前が知らない場合、L児は成人言語の発音と完全に異なる単語（例えば「gaga」）を創り出した。これらの創造的な発音は一時的に定着することもあるが、そのあと外部修正或いは自己修正を経て成人言語に訂正されることもある。そして、意味概念を習得する際に、語の意味範疇にも創造的な部分が存在する。L児は意味拡大或いは意味縮小のストラテジーを用い、単語の意味範疇を成人言語より小さいか大きいかにように変えた（例えば、「姐姐」は最初に親族のお姉さんだけを指し、スイカを「ボール」と呼ぶ）。L児のこのような意味範疇の習得の特徴に関して、呉天敏・許政援（1979）では同じような指摘をした。また、朱（2001）では呼称名詞が同じ習得順番をとることを端的に示している。認知の発達に伴い、意味範疇が段々成人言語に近

づくと同時に、個別のカテゴリも形成させていく（例えば、「車」「轿车」「卡车」「摩托车」）。

以上のように、本研究は日中バイリンガル幼児を対象とし、1才7ヵ月から2才1ヵ月までの語彙発達について追跡調査を行った。品詞、発音や意味概念を巡る記述や分析により、L児の初期の語彙発達の特徴が明らかになった。L児は二言語環境に育てられたが、二言語との接触時間、言語自体の特性及び生活経験などの影響を受け、二言語能力に大きな相違を見せた。発音、品詞や意味概念などの習得は生理的発達や認知的発達に制約されながら、言語学習の過程における音声変化、語彙創造、意味拡大や意味縮小などの学習方略を取るという言語学習の創造性の一面が存在する。今回の調査期間は言語発達の極初期の短い期間に限定したため、幼児期の語彙発達の全過程を把握し、そして二言語の学習過程の特徴を比較するには、今後継続的に追跡する必要がある。

注

- 1) 英語と中国語のバイリンガル研究では葉彩燕（2004）、曹俐嬌（2007）、黄雪云（2017）などの語彙や文法など記述に対して、英語と日本語のバイリンガル研究では中村ジュニス（2010）、杉本貴代（2016）など意味理解、文法形式など言語形態に焦点を当てたほか、心理言語学、認知言語学の視点からアプローチした研究が盛んになり、田浦秀幸（2014）、田浦秀幸・清水 かさ・乗次章子（2014）、御手洗靖（2014）、久津木文・田浦秀幸（2019）などが挙げられる。そして、中国語と韓国語、中国語と日本語のバイリンガル研究には、柳蘭熙（2013）、郭静（2013）、高橋郁文（2005）が発表された。
- 2) 詳しくは友沢昭和（2012）「言語環境調査から見えるもの」2009-2011年度科研費補助金基盤研究（C）研究成果報告書『日本語母語児童への国語教育と非母語児童への日本語教育を言語環境から再構築する試み』1：p 91-119 を参照されたい。
- 3) 祁文恵（2011）は実際に用いた意味概念に基づき、3才前の幼児の語彙を4大分類、15小分類に分けた。詳しくは祁文恵（2011）『三岁幼儿语言的语义研究』を参照されたい。
- 4) 言語爆発の定義、特に言語爆発の開始時期について、様々な意見が分かれている。そして言語爆発の仮設として、命名の洞察、精緻概念の獲得、カテゴリ分け能力の獲得などが挙げられる。

それらに関する先行研究の紹介は小林哲生・南泰浩・杉山弘晃（2013）を参照されたい。

- 5) 筆者自身は日本での子育てで日本人幼児と頻繁に接触する中で、日本人幼児は「くっく」「じーじ」などの幼児語を大量に使うことを観察した。そして、伊藤克敏（『こどものことば一習得と創造』p 22）でも同じような同音反復の現象を指摘した。
- 6) 従来の品詞分類によると、擬音詞は成人言語において、独立な品詞ではなく、動詞も副詞もなる。ここでは、音や声を直接に言語化するものという語源の独特性から、擬音詞を一種の独特の言語現象と見なす。
- 7) 一般的に、間投詞は字面的意義を持たず、喜怒哀楽の感情、応答や呼びかけを反射的に表す語とされる。挨拶表現では特定の場面において対人配慮の慣用表現で、字面的意義が存在するが、言語行動の中で礼儀的手段としての語用的機能がさらに際立つ。字面的意義より語用的機能や話者の心理から見れば、間投詞や挨拶表現はある程度共通する。そのため、ここで従来の間投詞という用語を採用するが、実際に両者とも一種の言語現象として捉えている。

参考文献

- 曹例嬌（2007）「英汉双语儿童特殊疑问句习得研究」硕士论文 北京师范大学
- 陳曉湘（2015）『南方汉语幼儿咿呀学语与早期语言发展个案研究』湖南大学出版社
- 陳永香，朱莉琪（2014）「身体部位与早期习得的汉语动词的联结及其对动词习得年龄的影响」『心理学报』7：p 912-921
- 范莉（2007）「儿童对福通话中否定词的早期获得」『现代外语』30-2：p 144-154
- 范莉，宋剛（2016）「非 SVO 语序的早期习得——以‘客体—动词’语序为例」『外语教学与研究』48-1：p 49-60
- 郭静（2013）「汉日双语环境下的儿童汉语习得个案考察」硕士论文 山东师范大学
- 黄雪云（2017）「新加坡英语家庭华族学前儿童的华语词汇和句法发展研究」博士论文 华东师范大学
- 黄月華（2011）「汉语趋向动词的多义研究」博士论文 湖南师范大学
- 孔令達等（2004）『汉族儿童实词习得研究』安徽大学出版社
- 李金蘭（2006）「现代汉语身体动词的认知研究」博士论文 华东师范大学
- 李明宇（2004）『儿童语言的发展』华东师范大学出版社
- 李尧（2013）『幼儿话语行为效能研究』世界图书出版社
- 柳蘭熙（2013）「中韩双语家庭双胞胎儿童的双语习得个案研究」硕士论文 山东大学
- 劉穎（2009）「汉语儿童早期语言发展个案研究」博士论文 山东大学
- 祁文惠（2011）『三岁幼儿语言的语义研究』世界图书出版社
- 宋剛（2009）「普通话儿童早期动词习得：范畴、论元结构与句法线索」博士论文 北京语言大学
- 吳天敏，許政援（1979）「出生到三岁儿童语言发展记录的初步分析」『心理学报』2：p 153-165

- 高橋郁文 (2005) 「中日双语儿童之语码转换、语码混用及语言偏误研究」 硕士论文 清华大学
- 武文傑 (2011) 『現代漢語視覺行為動詞研究』 人民出版社
- 肖丹, 楊小露 (2003) 「一歳兒童動詞發展的個案研究」 『清华大学教育研究』 24-1 : p 86-91
- 謝錫金 (2006) 『香港幼兒口語發展』 香港大學出版社
- 楊小路 (2009) 『焦點與極差：現代漢語“才”“就”的兒童語言習得研究』 北京大學出版社
- 葉彩燕 (2004) 「粵英雙語兒童早期的語法發展」 『當代語言學』 6 (1) : 1-18
- 朱万喜 (2001) 「兒童語言中的親屬稱謂詞」 『安徽大學紀要』 29-2 : p 303-308
- 伊藤克敏 (1999) 『こどものことは一習得と創造』 勁草書房
- 今井むつみ (2000) 『心の生得性：言語・概念獲得に生得的制約は必要か』 共立出版
- 大喜多喜夫 (2000) 『英語教員のための応用言語学』 第7版 昭和堂 p 22-28, p 51-66
- 小椋たみ子 (2007) 「日本のこどもの初期の語彙発達」 『言語研究』 132 : p 29-53
- 小椋たみ子、小山正、水野久美 (2015) 『乳幼児期のことばの発達とその遅れ：保育・発達を学ぶ人のための基礎知識』 ミネルビア書房
- 鹿取廣人 (2003) 『ことばの発達と認知の心理学』 東京大学出版会
- 小林哲生、南泰浩、杉山弘晃 (2013) 「語彙爆発の新しい視点：日本語学習児の初期語彙発達に関する縦断データ解析」 『ベビーサイエンス』 12 : p 40-62
- 久津木文・田浦秀幸 (2019) 「幼児期の外国語学習が認知にもたらす影響：日・英バイリンガル幼稚園の園児を対象にした予備的検討」 『神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇』 22 : p 41-48
- 新里勝彦 (1978) 「『主語』と『主題』」 『沖縄国際大学文学紀要英語英文学編』 5 : p 29-46
- 杉本貴代 (2016) 「幼児の連濁獲得を規定する諸要因の検討：バイリンガル児の事例から」 『国立国語研究所論集』 11 : p 83-91
- 田浦秀幸 (2014) 「日英バイリンガルの神経心理言語学的メカニズム」 『京都工芸繊維大学工芸学部研究報告』 52 : p 1-26
- 田浦秀幸・清水つかさ・乗次章子 (2014) 「日英バイリンガル園児のメタ言語発達段階解明研究：日本語モノリンガル園児との比較パイロットスタディー」 『Studies in language science working papers』 4 : p 1-12
- 友沢昭和 (2012) 「言語環境調査から見えるもの」 『日本語母語児童への国語教育と非母語児童への日本語教育を言語環境から再構築する試み』 1 : p 91-119
- 中村ジュニス (2010) 「バイリンガルになる - 乳児の二言語理解の発達」 『教育研究』 52 : p 199-206
- 守田貴弘 (2013) 「意味的分類科学的妥当性」 『言語研究』 144 : p 29-53
- 御手洗靖 (2014) 「人工の日英バイリンガル養育児における英語の目的格関係詞節の発達」

- 『大分大学教育福祉科学部研究紀要』36 (1) : p 79-90
- Allport, F.H (1924). Social psychology Riverside Press.
- Chomsky, Noman (1959). Review of Verbal Behavior. by B. F. Skinner Language 35 : 26-58.
- Lenneberg, E.H. (1967). Biological Foundations of Language. John Wiley & Sons, Inc. (和訳 『言語の生物学的基礎』第三版 佐藤正哉、神尾昭雄訳 1980 大修館書店 p 412-413)
- Mac Whinney, Brian (1985). Children's International Language Data Exchange System-CHILDES (中国語訳『国際児童語言研究方法—CHILDES 国際児童語料庫データ儲存和分析系統』許文勝、高曉妹訳 教育科学出版社)
- Mowrer, O.Hobart (1960a). Learning theory and behavior. John Wiley & Sons, Inc.
- Mowrer, O.Hobart (1960b). Learning theory and behavior. John Wiley & Sons, Inc.
- Piaget, J. (1950). The principles of genetic epistemology. (和訳『発生的認識論』滝沢武久訳 1972 白水社)
- Jakobson, Roman 「なぜ『ママ』と『パパ』なのか…」『ヤコブソン・セレクション』桑野隆、朝妻恵里子訳 平凡社 2015 p 333-p 341
- Skinner, B.F. (1957). Verbal Behavior. Appleton-century-crofts, Inc.
- Whitehurst, G.J., and Ross Vasta (1975). Is language acquired through imitation?. Journal of Psycholinguistic Research 4 : p 37-59.